

吾云く●遊山し来る

山曰く●此の室を離れずして速かに道將ち來れ

吾云く●山上の鳥兒頭雪に似たり、洞底の遊魚忙として不徹と、道吾、雲巖と侍立するの次で、藥山問ふて曰く●智不到の處、切に思む道著すること、を道著すれば即ち頭角生ず、智頭陀は怎麼生

吾便ち出て去る、雲寶藥山に問ふて云く●智師兄什麼と爲してか、和尚に祇對せざる

山曰く●我れ今日背痛、是れ他れ卻つて會せり、汝去つて問取せよ

雲巖便ち來つて道吾に問ふて云く●師兄適來什麼と爲してか、和尚に祇對せざりし

吾曰く●汝却つて去つて和尚に問取せよと、石霜又た道吾に問ふ●師百年の後ち人あつて極則の事を問はば、作麼生か他に向つて道はん

吾便ち●沙彌と喚ぶ、沙彌應諾す、吾曰く●淨餅の水を添却し着せよと、吾良久して却つて石霜に問ふ●適來什麼をか問ふ

霜再ひ舉ぐ、吾便ち起ち去る、石霜異日又た問ふ●和尚一片の骨敲着すれば、銅の鳴るに似たり、什麼の處に向つてか去る

吾便ち●侍者と喚ぶ、侍者應諾す、吾曰く●駟年にして去る

*

*

*

*

*

*

(三三)麻谷錫を持して、章敬に到り、禪牀を遷ること三匝、錫を振ること一下、卓然として立つ、敬曰く●是々

雪寶着語して云く●錯

麻谷又た南泉に到り、禪牀を遷ること三匝、錫を振ること一下、卓然として立つ、泉の曰く●不是々々

雪竇着語して云く●錯

麻谷當時云く●章敬は是と道ふ和尚什麼と爲してか不是と道ふ

泉曰く章敬は則ち是々汝は不是此れは是風力の轉する處終に敗壞を成すと永嘉曹溪に到り六祖に見へ禪牀を遷ること三匝錫を振ること一下卓然として立つ祖曰く●夫れ沙門は三千の威儀八萬の細行を具す大徳何れの方より來つて大我慢を生ず

*

*

*

*

*

*

(三九張拙秀才西堂の藏禪師に參し問ふて云く●山河大地是れ有か是れ無か

三世の諸佛是れ有か是れ無か

藏曰く●有

秀才云く●錯

藏曰く●先輩曾て什麼の人にか參見し來れる

秀才云く●徑山和尚に參見し來る某甲凡そ問話する所あれば徑山皆な

無と言ふ

藏曰く●先輩何の眷屬かある

秀才云く●一の山妻と兩箇の癡頑とあり

藏又た却つて問ふ●徑山甚の眷屬かある

秀才云く●徑山は古佛なり和尚渠れを誘することなくんば好し

藏曰く●先輩徑山に似ることを得ん時を待つて一切に無と言へ

張拙俛首す龍牙衆に示して道く●夫れ參學の人は須らく祖佛を透過し

て始めて得べし新豐和尚道く●祖佛の言教を見て生冤家の如くにし始

めて參學の分あり若し透不得ならば則ち祖佛に瞞せられ去らんと

時に僧あり問ふ●祖佛還つて人を瞞するの心ありや也た無しや

牙曰く●汝道へ江湖遠つて人を碍るの心ありや也た無しや

(四〇)文殊無着に問ふ●近離什麼の處ぞ

着云く●南方

殊曰く●南方の佛法如何んが住持す

着云く●未法の比丘少しく戒律を奉ず

殊曰く●多少衆ぞ

着云く●或は三百或は五百と無着便ち文殊に問ふ●此の間如何んが住

持す

殊曰く●凡聖同居龍蛇混雜

着云く●多少衆ぞ

殊曰く●前三々後三々と雪竇頌出して云く

千峰盤屈色如藍

誰謂文殊是對談

堪笑清涼多少衆

前三々與後三々

と僧あり風穴に問ふ●如何んか是れ清涼山中の主

穴曰く●一句無着の問に違わらず今に至まで猶ほ野盤の僧と作る又た

僧瑯瑯の覺和尚に問ふ●清淨本然云何がして忽生す山河大地

覺曰く●清淨本然云何がして忽生す山河大地と明招の獨眼龍其意を頌

して曰く

廓周沙界勝伽藍

滿日文殊是對談

言下不知開佛眼

回頭只見翠山巖

(二四)寶壽、胡釘鉢に問ふて曰く●久しく胡釘鉢と聞く便ち是なることなしや否や

胡云く●是

壽曰く●還つて虚空を釘ち得てんや麼や

胡云く●請ふ師、打破し將ち來れ

壽便ち打つ、胡肯ぜず、壽曰く●異日自ら多口の阿師あつて、備がために點破する在らんと、胡後ちに趙州に見へて前話を舉似す、州曰く●汝什麼に因てか、他に打せらる

胡云く、知らず、過ち什麼の處にかある

州曰く●只だ這の一縫、尙ほ奈何ともせず、更らに他をして虚空を打し來らしめんや

胡便ち休し去る、州代つて曰く●且らく這の一縫を釘せ

胡是に於てか省あり

*

*

*

*

*

*

*

*

*

*

(二五)京兆の米七師、行脚して歸る、一の老宿あり問ふて曰く●月夜の斷井索人

皆な喚んで蛇となす、未審し七師の佛を見る時、喚んで什麼とか作す

七師云く●若し所見あらば即ち衆生に同せん

老宿曰く●也た是れ千年の桃核と、忠國師、紫璘供奉に問ふ●聞説らく供

奉思益經を解註すと、是なりや否や

奉云く●是

師曰く●凡そ經を註するに當ては、須らく佛意を解して始めて得べし

奉云く●若し意を會せずんば、争てか敢へて經を註すと言はん

師遂に侍者をして一碗の水を將つて七粒の米一隻の筋を碗上に在へて、

供奉に送與せしめ問ふて曰く●是れ什麼の義ぞ
奉云く●不會

師曰く●老僧が意すら尙ほ會せず、更らに甚の佛意を説かんや

* * * * *

(二四)鏡清僧に問ふて曰く●門外是れ什麼の聲ぞ

僧云く●雨滴の聲

清曰く●衆生顛倒して已に迷ひ物を逐ふ

僧云く●和尙作麼生

清曰く●泊んと已に迷はざらんとす

僧云く●泊んと已に迷はざらんとすとの意旨如何

清曰く●出身は猶ほ易かるべく、脱體に道ふこと應さに難かるべしと雪

寶の頌に云く

虛堂雨滴聲 作者難酬對

若謂曾入流 依前還不會

會不會南山 北山轉誘孺

* * * * *

(二五)僧あり夾山に問ふ●如何んが是れ法身

山曰く●法身無相

僧云く●如何なるか是れ法眼

山曰く●法眼無瑕

僧又た雲門に問ふ●如何なるか是れ法身

門曰く●六不收と、雪竇門の句を頌出して云く

禪學の奥義 波瀾萬丈

一二三四五六

碧眼胡僧數不足

少林謾道付神光

卷衣又說歸天竺

天竺茫茫無處尋

夜來却對乳峰宿

一如曰く講ずる者あり法身を説て云く堅に三際を窮め横に十方に亘ると而かも是れ父母所生の鼻孔を將つて扭捏するものゝみとは曾て孚上座と典座との問答にあらざや教中に道ふ佛の眞法身は猶ほし虚空の若し物に應して形を現すること水中の月の如しと此句若し恁麼に情解せば過箭新羅に落さん蓋し教中また道ふあり是の法は思量分別の能く解する所に非すと雲門六不收の答話多く人の情解を惹く所以に雪竇能く縫罅なき處に於て眼目を出たし頌出して人をして見せしむ古哲云ふ一句透れば千句萬句一時に透ると借問す是れ法身か是れ祖師か道得せずんは放却三十棒ならん

(三) 一僧あり雲門に問ふて云く ● 如何なるか是れ塵々三昧

門曰く ● 鉢裏の飯 桶裏の水と 雪竇の頌あり云く

鉢裏飯兮桶裏水

多口阿師難下嘴

北年南星位不殊

白浪滔天平地起

擬不擬兮止不止

箇々無視長者子

一如曰く圓悟禪師雲門の答處に着語して曰ふ ● 布袋裏に錐を盛る金沙混雜す將錯就錯含元殿裏長安を問はずと知らず君門の答處を定當得すや麼や得せは雲門即ち諸人の手中に在らんも若し然からずんは諸人却つて雲門の手裏に落ちん徒らに其の答處の有句底に問着すれば雲門又た君に鉢裏の飯粒々皆な圓に桶裏の水滴々悉く

濕すと言はん、敢へて問ふ、如何んか是れ雲門端的爲人の處と、寒山の詩に道ふ

六極常聚苦	九維徒自論
有才遺草澤	無勢閉蓬門
日上巖猶暗	煙消谷尙昏
其中長者子	箇々総無視

(四)道吾漸源と與に一家に至つて弔慰す、源棺を拍つて云く●生か死か

吾曰く●生とも也た道はじ、死とも也た道はじ

源云く●什麼と爲してか道はざる

吾曰く●道はじく

回つて中路に至つて源の云く●和尙快く某甲が與めに道へ、若し道はずんば和尙を打ち去らん

吾曰く●打たば即ち打つに任す、道ふことは即ち道はず

源便ち打つ、後ち道吾遷化す、源石霜に至つて前話を舉似す、霜曰く●生と

も也た道はじ、死とも也た道はじ

源云く●什麼と爲してか道はざる

霜曰く●道はじく

源言下に省あり、源一日鉢子を將ち法堂の上に於て、東より西に過ぎ西より東に過ぐ、霜曰く●什麼をか作す

源云く●先師の靈骨を覓む

霜曰く●洪波浩渺として白浪滔天、什麼の先師の靈骨をか覓めん

雪竇着語して云く●蒼天々々

源云く●正に好し力を看るに
太原の孚云く●先師の靈骨猶ほ在り

(二五)雪峰住庵の時、兩僧あり來りて禮拜す、峰來るを見、手を以つて庵門を托し、身を放ち出でて曰く●是れ什麼ぞ

僧亦た云く●是れ什麼ぞ

峰低頭して庵に婦る、僧後ち巖頭に到る、頭問ふて曰く●甚麼の處よりか來る

僧云く●嶺南より來る

頭曰く●曾て雪峰に到るや麼や

僧云く●曾て到る

頭曰く●何の言句か有る

僧前話を擧す、頭曰く●他れ甚麼とか道ふ

僧曰く●他れ無語低頭して歸庵す

頭曰く●噫、我れ當初に悔らくは他に向つて、未後の句を道はさりしことを、若し伊に向つて道はましかば、天下の人雪老を奈何ともせじ

僧夏末に至つて再び前話を擧して請益す、頭曰く●何ぞ早く問はざる

僧云く●未だ敢へて容易ならず

頭曰く●雪峰我れと同條に生すと雖ども、我れと同條に死せず、未後の句を識らんと要せば、只た這れ是

*

*

*

*

*

*

*

*

*

*

(二六)招慶一日羅山に問ふて云く●巖頭曰く、恁麼々々不恁麼々々々と意旨如

何山召して曰く●大師

慶應諾す、双明亦た双暗と慶禮謝して去る。三日の後ち又た問ふて云く●

前日和尙の垂慈を蒙むる、只た是れ看不破

山曰く●情を盡し汝に向つて道へ了れり

慶云く●和尙是れ火を把つて行け

山曰く●若し恁麼ならば大師の疑處に據つて問へ將ち來れ

慶云く●如何んか是れ双明亦た双暗

山曰く●同生亦た同死

慶當時禮謝して去る、後ちに僧あり招慶に問ふて云く●同生亦た同死の

時如何

慶曰く●狗口を合取せよ

僧云く●大師口を収取して飯を喫せよ

* * * * *

(二四)長沙一日遊山し歸つて門首に至る、首座問ふて云く●和尙什麼の處にや
去來する

沙曰く●遊山し來る

首座云く●什麼の處にか到り來る

沙曰く●始めは芳草に隨つて去り、又た落花を遂ふて回る

座云く●大に春意に似たり

沙曰く●也た秋露の芙蓉に滴するに勝れり

雪竇着語すらく●答話を謝すと乃ち頌して云く

大地絶纖埃、何人眼不開

始随芳草去、又逐落花回

羸鶴翹寒木、狂猿嘯古臺。

長沙無限意、咄

* * * * *

(二五) 德山、鴻山に到り、複子を挾んで法堂の上に於て、東より西に過ぎ、西より東に過ぐ、顧視して●無々と云つて便ち出づ、雪竇着語すらく●勘破了也。德山門首に至り、却つて云ふ●也。た草々なることを得ずと、便ち威儀を具し、再び入つて相見す、鴻山座する次で、德山座具を提起して云く●和尚、鴻山拂子を取らんと擬す、德山便ち喝す、拂袖して出づ、雪竇着語すらく●勘破了也。德山法堂を背却し、草鞋を着けて便ち行く、鴻山晚に至り、首座に問ふ●適來の新到、什麼の處にか在る

首座云く●當時法堂を背却し、草鞋を着けて出て去れり。鴻山曰く●此の子已後、孤峰頂上に向つて草庵を盤結し、佛を呵し、祖を罵り、去ることあらんと、雪竇着語して云く●雪上に霜を加ふ而して頌出すらく

一勘破兮二勘破

雪上加霜會、險墮

飛騎將軍入、虜庭

再得完全能、幾箇

急走過兮不放過

孤峰頂上草裏坐

咄

萬斛盈舟信、手擎

却因一粒甕吞蛇

拈提百轉舊公案

撒却時人幾眼沙

漩復高潮

禪海の波瀾萬丈は予これを觀了りたり、只だ夫れ波瀾萬丈、此裏誰か怒濤の
漩復するものあるを怪まんや、寶鏡三昧の如き、此れ是の海巨波中の高潮と
して看るべきものの一、寧ろ哲理的美文の資鑑となす、予は自ら誤らざるを
負ふ

如是之法	佛祖密附	汝今得之	宜能保護
銀盤盛雪	明月藏鷺	類而不齊	混則知處
意不在言	來機亦赴	動成窳白	差落願佇
背解共非	如大火聚	但形文彩	即屬染汚
夜半正明	天曉不露	爲物作則	用拔諸苦
雖非有爲	不是無語	如臨寶鏡	形影相觀

汝是非渠	渠正是汝	如世嬰兒	五相完具
不去不來	不起不住	婆々和々	有句無句
終不得物	語未正故	重難六爻	偏正回互
疊而成三	變盡爲五	如莖草味	如金剛杵
正中妙挾	敲唱双舉	通宗通途	挾帶挾路
錯然則吉	不可犯忤	天真而妙	不屬迷悟
因緣時節	寂然昭著	細入無間	大絕方所
毫忽之差	不應律呂	今有頓漸	緣立宗趣
宗趣分矣	即是規矩	宗通趣極	眞常流注
外寂內搖	繫駒伏鼠	先聖悲之	爲法檀度
隨其顛倒	以緇爲素	顛倒想滅	有心自許
要合古轍	請觀前古	佛道垂成	千劫觀樹

如虎之缺	如馬之鼻	以有下劣	寶几珍御
以有驚異	狸奴白牯	舞以巧力	射中百步
箭鋒相值	巧力何預	木人方歌	石女起舞
非情識到	寧容思慮	臣奉於君	子順於父
不順不孝	不奉非輔	潛行密用	如愚如魯
只能相續	名主中主		

惜むらくは禪林の竹帛其作者の何人なるやを失却して今や傳ふるに由なきことを唯た當時敲骨打髓の高士あつて天薫地の靈筆に托し古今を一放一収するを看るのみ予曾て洞山五位顯訣の注を閲せりしに
 悟本禪師初め新豐に住し晩に洞山に遷り大に其道を駕し偏正五位を立て當時の首唱と爲り今此に亦た洞山五位顯訣と曰ふ則ち五位の設洞山より始まる是れ天下の通論なり是を以て寶鏡三昧歌と玄中銘雪獅子吟

偈等と詞語多く相同じ皆な悟本に出つること疑なし

とあり然らば寶鏡三昧果して悟本の作と云ふ非なきか而も

因に曾山に辭す悟本禪師遂に囑して曰く

吾雲巖先師の處に在りて親しく寶鏡三昧を印せらる事窮めて的要今汝に付す

と會元の記者の云ふ處を奈何とすべき予は其の何れを是とし何れを非とし信疑を決せんかに苦しむ識者請ふ判定せよ

同安の常察禪師は九峰道虔の法嗣蓋し禪林の一虎將たり十玄談なるものあり佛法の玄妙玄微玄奧玄遠玄機玄立を道破せるの玄句即ち察師の筆端に成れるもの共に千秋に傳ふるに足るの傑作にあらずや

(一) 問君心印作何顏 心印誰人敢授傳
 歷劫坦然無變色 呼爲心印早虛言

須知本自虛空性
 莫謂無心便是道
 祖意如空不是空
 三賢尙未明斯旨
 透網金鱗猶滯水
 慇懃爲說西來意
 迢々空劫莫能收
 妙體本來無處所
 靈然一句超群象
 撒手那邊千聖外
 濁者自濁清者清
 誰言卞壁無人鑑

將喻紅爐火裡蓮
 無心猶隔一重關
 玄機爭墮有無功
 十聖那能達此宗
 回途石馬出紗籠
 莫問西來及與東
 豈爲塵機作繫留
 通身何更有縱由
 迥出三乘不假修
 回程堪作火中牛
 菩提煩惱等空平
 我道驪珠到處晶

(三)
 萬法泯時全體現
 大夫自有冲天氣
 三乘次第演金言
 初說有空人盡執
 龍宮滿藏醫方義
 眞淨界中纔一念
 勿於中路事空王
 雲水隔時君莫住
 尋思去日顏如玉
 撒手到家人不識
 返本還源事亦差
 萬年松逕雪深覆

(四)
 三乘分處假安名
 莫向如來行處行
 三世如來亦共宜
 後非空有衆皆緣
 鶴樹終譚理未玄
 閻浮早是八千年
 策杖直須達本鄉
 雲山深處我非忘
 嗟嘆來時髮似霜
 更無一物敵尊堂
 本來無住不名家
 一帶峰巒雲更遮

(五)
 萬年松逕雪深覆

(六)
 返本還源事亦差

(七)
 萬年松逕雪深覆

禪學の奥義 漩源高潮

賓主睦時純是妄
還鄉曲調如何唱

君臣合處正中邪
明月堂前枯木華

(八)

涅槃城裏尙猶危
權挂垢衣云是佛

陌路相逢沒定期
却裝珍御復名誰

木人夜半穿靴去
萬古碧潭空界月

石女天明戴帽歸
再三撈撈始應知

披毛戴角入郵來
煩惱海中爲雨露

優蓋羅華火裏開
無明山上作雲電

(九)

鏡湯爐炭吹教滅
金鎖玄關留不住

劍樹刀山唱使摧
行於異類且輪回

枯木巖前差路多
鷺鷥立雪非同色

行人到此盡蹉跎
明月芳華不似他

(一〇)

了々々時無可了
了々々處亦須訶

空裡蟾光撮得麼
空裡蟾光撮得麼

了々々時無可了
了々々處亦須訶

空裡蟾光撮得麼
空裡蟾光撮得麼

禪玄中の玄曲此種の文を措て何れにか求めん所謂空裏の蟾光撮得し盡して餘蘊なき者に非ずや』僧璨禪師は二祖鑑智をして是れ吾寶なりと稱せしめたる大醫大師即ち是れ斯界有名なる信心銘は實に同師の管毛に依つて世に寄附せられたるもの深遠の理を優麗に書き流さる邊春海として見る目けてなきの懐をなさしむ試みに舉せんか

至道無難	唯嫌棟擇	但莫憎愛	洞然明白
毫釐有差	天地懸隔	欲得現前	莫存順逆
違順相爭	是爲心病	不識玄旨	徒勞念靜
圓同大虛	無缺無餘	良由取捨	所以不如
莫逐有緣	勿住空忍	一種平懷	泯然自盡

止動歸止
 一種不通
 多言多慮
 歸根得旨
 前空轉變
 二見不住
 二由一有
 無咎無法
 境由能境
 一空同兩
 大道體寬
 執之失度

止更彌動
 兩處失功
 轉不相應
 隨照失宗
 皆由妄見
 慎勿追尋
 一亦莫守
 不生不心
 能由境能
 齊含萬象
 無難無易
 必入邪路

唯滯兩邊
 道有沒
 絕言絕慮
 須臾返照
 不用求真
 纔有是非
 一心不生
 能隨境滅
 欲知兩段
 不見精粗
 小兒狐疑
 放之自然

寧知一種
 從空背空
 無處不通
 勝却前空
 唯須息見
 紛然失心
 萬法無咎
 境透能沈
 元是一空
 寧有偏黨
 轉急轉遲
 體無去住

任性合道
 不好勞神
 六塵不惡
 法無異法
 迷生寂亂
 夢幻空華
 眼若不睡
 一如體立
 泯其所以
 兩既不成
 契心平等
 一切不留

道遙絕惱
 何用疎執
 還同正覺
 妄自愛著
 悟無好惡
 何勞把捉
 諸夢自除
 兀爾忘緣
 不可方比
 一何有爾
 所作俱息
 無可記憶

緊念華真
 欲趣一乘
 智者無為
 將心用心
 一切二邊
 得失是非
 心若不異
 萬法齊觀
 止動無動
 究竟窮極
 狐疑淨盡
 虛明自照

昏沈不好
 勿惡六塵
 恐人自縛
 豈非大錯
 妄自斟酌
 一時放却
 萬法一如
 歸復自然
 動止無止
 不存軌則
 正信調直
 不勞心力

非思量處	識情難測	真如法界	無他無自
要急相應	唯言不二	不二皆同	無不包容
十方智者	皆入此宗	宗非促延	一念萬年
無在不在	十方目前	極小同大	忘絕境界
極大同小	不見邊表	有即是無	無即是無
若不如是	必不須守	一即一切	一切即一
但能如是	何慮不畢	信心不二	不二信心
言語道斷	非去來今		

と、實に江路野梅の香、優に西來の意を漏洩するの妙文にあらざとせんや、而も予の見て敬虔措く能はず、管に三讀のみに止めざらしむるものを、永嘉の「證道歌」となす、今茲に君と共に一讀し看ん

◎ 君見ずや、絶學無爲の間道人、妄想を除かず、眞を求めず、無明の實性即ち佛

性、幻化の空身即ち法身、法身覺了すれば一物なし、本源自性天真佛、五陰の浮雲は空去來、三毒の水泡は虚出沒、實相を證すれば人法なし、刹那に滅却す阿鼻の業、若し妄語を將つて衆生を誑さば、自ら拔舌を招くこと、塵沙劫ならん、頓に如來禪を覺了すれば、六度萬行體中に圓かなり、夢裡明々として六趣あり、覺て後ち空々として大千もなし、罪福も無く損益もなし、寂滅性中間覓することなかれ、比來の塵鏡未だ曾て磨さず、今日分明に須らく剖折すべし、誰か無念誰か無生、若し實に無生ならば不生もなし、機關木人を喚取し問へ、佛を求めて功を施さば、早晚か成ぜん、四天を放つて把握することなかれ、寂滅性中隨つて飲啄せよ、諸行は無常にして一切空なり、即ち是れ如來の大圓覺、決定の説は、眞僧を表す、人あり冒はずんば情に任せ、て徵せよ、直ちに根源を截るは佛の印する所、葉を摘み枝を尋ぬるは我れ能はず、摩尼珠人譏らず、如來藏裡に親しく收得す、六般の神用空不空、一顯

の圓光色非色、五眼を淨し、五力を得、唯だ證して乃ち知る、測るべきこと難し、鏡裡に形ちを看る、見ること難からず、水中に月を捉ふ、争てか拈得せん、常に獨り行き、常に獨り歩す、達者同じく遊ぶ、涅槃の路、調へ古り、神清して風自ら高し、貌頓け骨剛して人顧みず、窮釋子口に貧と釋す、實に是れ身貧にして道貧ならず、貧なれば則ち身常に縷褐を被す、道あれば則ち心に無價の珍を藏む、無價の珍用れども盡ることなし、物を利し縁に應して終に悵まず、三身四智體中に圓かなり、八解大通心地に印す、上士は一決して一切了し、中下は多聞なれども多く信せず、但だ自ら懷中に垢衣を解く、誰か能く外に向つて精進に誇らん、他の謗するに従し、他の非するに任す、火を把つて天を焼く、徒に自ら疲る、我れ聞て恰も甘露を飲むが如し、銷融して頓に不思議に入る、惡言は是れ功德なりと觀ずれば、此れ則ち吾が善知識と成る、訕謗に因て怨親を起さざれば、何ぞ無生慈忍の力を表せん、宗も亦

た通ず、説も亦た通ず、定慧圓明にして空に滯らず、但た我れ獨り達了するのみに非ず、恒沙の諸佛體皆な同じ、獅子吼無畏の説、百獸之れを聞て皆な腦裂す、香象奔波するも威を失却す、天龍寂かに聽て欣悅を生ず、江海に遊び山川を涉り、師を尋ね道を訪ふて參禪を爲す、曹溪の路を認得してより、生死相關らざること了知す、行も亦た禪、座も亦た禪、語默動靜體安然せん、縦ひ鋒刀に遇ふとも常に坦々假饒ひ毒藥も也た間々、我か師、然燈佛に見ゆるを得て多劫會て忍辱仙となる、幾回か生し幾回か死す、生死悠悠として定止なし、頓に無生を悟了してより、諸ろの榮辱に於て何ぞ憂喜せん、深山に入り蘭若に住す、岑巖幽邃たり、長松の下優遊して靜坐す、野僧が家、閑寂たる安居實に瀟洒、覺すれば則ち了して功を施さず、一功有爲の法と、同じからず、住相の布施は生天の福、猶ほし箭を仰て虚空を射るが如し、勢力盡きぬれば箭還つて墜つ、來生の不如意を招ぎ得たり、争てか似ん無爲

實相の門、一超直入如來地なるに但だ本を得て末を愁ることなかれ、淨瑠璃に寶月を含むか如し、我れ今此の如意珠を解す、自利々他終に歇きず、江月照らし松風吹く永夜の清宵何の所爲ぞ、佛性の戒珠心地に印す、霧露雲霞體上の衣、降龍の鉢、解虎の錫、兩鈴の金環鳴いて歷々是れ形を標して虚く事持するにあらざ、如來の寶杖親しく蹤跡す、眞をも求めず、妄をも斷ぜず、二法空にして無相なるとを了知す、無相は空なく不空もなし、即ち是れ如來の眞實相、心鏡明かに鑑みて碍りなし、廓然瑩徹して沙界に周れし、萬象森羅の影中に現ず、一顆の圓光内外に非らず、豁達の空は因果を撮ふ、莽々蕩々として殃禍を招く、有を棄て、空に著く病亦た然り、還つて溺を避けて火に投するか如し、妄心を捨て、眞理を取る、取捨の心巧偽となる、學人了せずして修行を用ゆ、眞に賊を認めて將つて子とすることをなす、法財を損し功德を滅することは、斯の心意識に由らざるはなし、是を以つて

禪門は心を了却す、頓に無生に入るは知見の力なり、大丈夫慧劍を乘る、般若の鋒さき金剛の鎧、但た能く外道の心を摧くのみに非ず、早く曾て天魔の膽を落却す、法雷を震ひ法鼓を撃ち、慈雲を布き甘露を洒ぐ、龍象の蹴踏潤ひ無邊三乗五性皆な醒悟す、雪山の肥膩更らに雜りなし、純ばら醍醐を出す我れ常に納む、一性圓かに一切の性に通じ、一法遍ねく一切の法を含む、一月普ねく一切の水に現じ一切の水月、一月に攝す、諸佛の法身我か性に入り、我性還つて如來と合す、一地具足す一切地、色にあらざ心にあらざ行業にあらざ、彈指に圓成す八萬の門、刹那に滅却す三祇劫一切の數句は數句にあらざ、吾が靈覺と何ぞ交渉せん、毀しるべからず、讚むべからず、體は虚空の若く涯岸なし、當處を離れずして常に湛然、覓むれば則ち知る、君が見るべからざることを取ることを得ず捨つることを得ず、不可得の中只麼に得たり、默のハ説き説の時默す、大施門開いて壅塞なし、人あり人れ

に何の宗をか解すと問はれ、報して道はん摩訶般若の力と或は是、或は非、人知らず、逆行順行天も測ることなし、吾れ早く曾て多劫を経て修ふ、是れ等閑に相誑惑するにあらず、法幢を建て宗旨を立す、明々たる佛教曹溪是れなり、第一の迦葉首めて燈を傳ふ、二十八代西天の記、江海を歴て此の土に入る、菩提達磨を初祖となす、六代の傳衣、天下に聞ふ、後人の得道何ぞ數を窺めん、眞をも立せず、妄本と空なり、有無俱に遣れば、不空も空なり、二十の空門元と著せず、一性の如來體自ら同じ、心は是れ根、法は是れ塵、兩種猶ほ鏡上の痕の如し、痕垢盡き除て光り始めて現ず、心法雙べ亡じて性則ち眞なり、嗟、末法の惡時世、衆生薄福にして調制し難し、聖を去ること遠くして邪見深かし、魔強く法弱くして怨害多し、如來頓教の門を説くことを聞て、滅除して瓦の如く碎かしめざるを恨む、作は心に在り、殃は身に在り、怨断して更らに人を尤むることを須ひざれ、無間の業を招かざることを得

んと欲せば、如來の正法輪を謗することなかれ、栴檀林に雜樹なし、鬱密深沈として獅子のみ住す、境靜かに林間にして獨り自ら遊ぶ、走獸飛禽皆な遠く去る、獅子見衆後へに隨ふ、三歳にして便ち能く大に哮吼す、若し是れ野子法王を逐ふならば、百千の妖怪も虚りに口を開かん、圓頓の教は人情を没し、疑ひあつて決せずんば、直ちに須らく争ふべし、是れ山僧、人我を逞するにあらず、修行恐らくは斷常の坑に墮せんことを、非も非ならず、是も是ならず、之れに差ふこと毫釐もすれば失すること千里、是なれば則ち龍女も頓に成佛し、非なれば則ち善星も生きながら陷墜す、吾れ早年より來かた學問を積み、亦た曾て疏を討ね、經論を尋ね、名相を分別して休することとを知らず、海に入り沙を算へて徒に自ら困す、却つて如來に苦ろに呵責せらる、他の珍寶をへて何の益かあると、從來踏躑し虚りに行することを覺ふ、多年枉げて風塵の客を作る、種性邪なれば錯つて知解す、如來圓頓の

制に達せず、二乗は精進して道心なく、外道は聰明にして智慧なし、亦た愚癡亦た小騷、空拳指上に實解を生ず、指を執して月となす枉げて功を施す根境法中虚りに提怪す、一法を見ざれば即ち、如來方さに名けて觀自在とすることを得、了すれば則ち業障本來空なり、米だ了せずんば還つて須らく宿債を償ふべし、飢て王膳に逢へども喰ふこと能はずんば、病て醫王に遇ふとも争てか癒ることを得ん、欲に在つて禪を行するは知見の力なり、火中に蓮を生ず終に不壞、勇施重を犯して無生を悟り、早時成佛して今に在り、獅子吼無畏の説、滾く嗟く憐愍たる頑皮鞭、但だ犯重の菩提を障ふることを知つて、如來の秘訣を開くことを見ず、二比丘あり姪殺を犯す、波離の曇光罪結を指す、維摩大士頓に疑を除く、猶ほ赫日の霜雪を鎖するが如し、不思議解脱の力、妙用恆沙也、た極りなし、四事の供養敢へて勞を辭せんや、萬兩の黄金も亦た消得し、粉骨碎身も未だ酬るに足らず、一句了然とし

て百億を超ふ、法中の主最も高勝、河沙の如來同じく共に證す、我れ今此の如意珠を解し、之れを信受する者は皆な相應す、了々として見るに一物なし、亦た人もなく亦た佛もなし、大千沙界海中の漚、一切の賢聖は電の拂ふが如し、假使ひ鐵輪頭上に旋るも、定慧圓明にして終に失せず、日は冷なるべく月は熱かるべくも、衆魔も眞説を壞すること能はず、象駕崢嶸にして謾りに途に進む、誰か見る螻蛄の能く轍を拒むことを、大象は兎徑に遊はず、大悟は小節に拘はらず、管見を將つて蒼々を謗することなかれ、未だ了せずんば、吾れ今君が爲めに決せん

と、眞箇直指の道訓、或は金翅海を撃きては霹靂空を破るか如く、或は蒼龍碧天に上りて千尋を掀翻し、猛虎竹林に入つて萬嶽を趨倒するに似たり、一毫端に佛祖の心肝を穿開して微韻の裏に禪機の大觀を透出しあるを看ずや、就中

觀惡言、是功德。此則成吾善知識。不因訕謗起怨親、何表無生慈忍力、と云ひ

縱遇鋒刀常坦々、假饒毒藥也問々

と云ふの類、何ぞ夫れ高潔にして而も超凡なるや、昔者天台の藕益大師、雲棲の自知録序中の言、即ち

善本當行、非微福故。惡本不當作、非畏罪故。

と云ひるを見て、發心せりと開く、今や永嘉の「證道歌」を讀み、惡言を善知識と觀じ訕謗に慈忍の心を致すもの、天下果して何人ぞや、謂ふ處の永嘉とは誰ぞ、元温州の人、戴家の子玄覺禪師、即ち是れ、曾て六祖に謁し、錫を振ひ瓶を攜へて、祖を繞ること三匝卓然として立ちしを以て、遂に六祖をして歎せしめ、善哉々々、少らく留まり一宿せよと云ふを禁じ能はさらしめたるの人、以つて其風容の一斑を知るに足らん、學人稱して眞覺大師と號しぬ、且つ聞く

夾山の無碍禪師、是れまた禪界超出の一大文豪なりと、予師の「降魔表」の一文を閲するに及んで始めて、始めて其言の實なるを證せり、君のため其表を一讀すべきか

臣聞く、三乘路廣くして法界涯りなく、智海晏清にして十方安泰なり、時に魔軍あつて兢起し心田を侵撓す、六賊既に強ふして心王驚動す、朝に百恠を生じ暮に千邪を起す、眞如を撼惑し法體を困勞す、菩提の道路隔絶して通せず、涅槃を破壊し三寶を傷殘す、無爲の珠玉悉く儉將せられ、大藏の法財皆な劫奪に遭ふ、塵勞日に翳し欲火天に亘り、法城を飄蕩し聖境を焚燒す、臣乃ち斯の如き暴亂を見、佛法以つて存しがたからんを恐れ、遂に六波羅密と與に商量して同じく剪滅せんとし、性空を遣して密使と爲し、魔軍を聽探す、見今屯して王蘊山中に在り、八萬四千餘衆あり、既に體勢を知る、計ること刹那にあり、遂に十八界の雄兵を點して並びに體空を立して號

と爲し人々無礙の力あり、箇々勇健の能を懷く、直心見性の功を爲して一正百邪の亂を去る堅固の甲を撰り、三昧の鏘を執る、智箭禪弓、光明の慧劍、大乘門中に向つて訓練し、寂滅山内に安營し、三明嶺上に旗を開き、八正路邊に排布す、大覺の性を遣して捉生の將と爲し、四方に游歴して妄想の踪を搜求し、無明の蹟を抄截す、復た慈悲王をして三毒の寨を破り、忍辱の師をして曠怒の城を伐ち、精進の軍をして傲慢の妖を除き、喜捨の士をして慳貪の賊を捉へしむ、逡巡として魔軍大に起り、殺氣天を衝く、臣乃ち摩訶を部領して一時に齊く入る、爾の時に當り、眼色を觀じ、耳聲を聽かじ、鼻香を嗅かじ、舌味を了せじ、身觸を受けじ、意攀緣せじ、一志前に向つて念々退かず、倏忽として魔軍大に敗ぶれ、六賊全く輪く殺戮無邊、掃除蕩盡、妄想を生擒し、無明を活捉して、領して涅槃場中に向ひ、慧劍を以つて斬つて三段と爲す、煩惱の林、當時に摧折し、人我の山化して微塵と作り、癡愛の網、智火

の焚燒に遭ふ、邪見の林、慧風に吹塌せらる、茲に因つて三明再び朗かに、四智重ねて圓かにして内外瑕なく、廓然として清淨なり、心王懽喜の殿に生し、眞如解脱の樓に登り、自性無碍の堂に遊び、三身法空の座に踞す、茲より法界寧靜にして永く罽座を絶し、共に生死の河を渡り、齊しく菩提の岸に到る、魔軍既に退く、合に具さに奏聞す

と云ふもの是れなり、圓轉自在の筆端、また得易からざるの名文にあらすや、禪海漩渦の高潮として看るべきもの、豈に箇の五巨にのみ限ると謂はんや、予は其大觀を江湖に紹介すれば、能事終れりと信するか爲めのみ、乃ち其一班に止めざるを得ざるは、當然の數なるへし

「佛祖大機歸掌握」

「人天命脈受指呼」

「徧現該於沙界」

收攝歸於微塵

三〇

禪學の奧義終

明治三十五年五月廿九日印刷
明治三十五年六月三日發行

正價金五拾錢

著述者 藤波一如

東京市神田區錦町一丁目十番地

發行者 大月隆

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

印刷者 佐久間衡治

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 株式會社 秀英舍工場

東京神田錦町一丁目 文學同志會本部

大坂江戸堀南通二丁目 文學同志會大阪支部

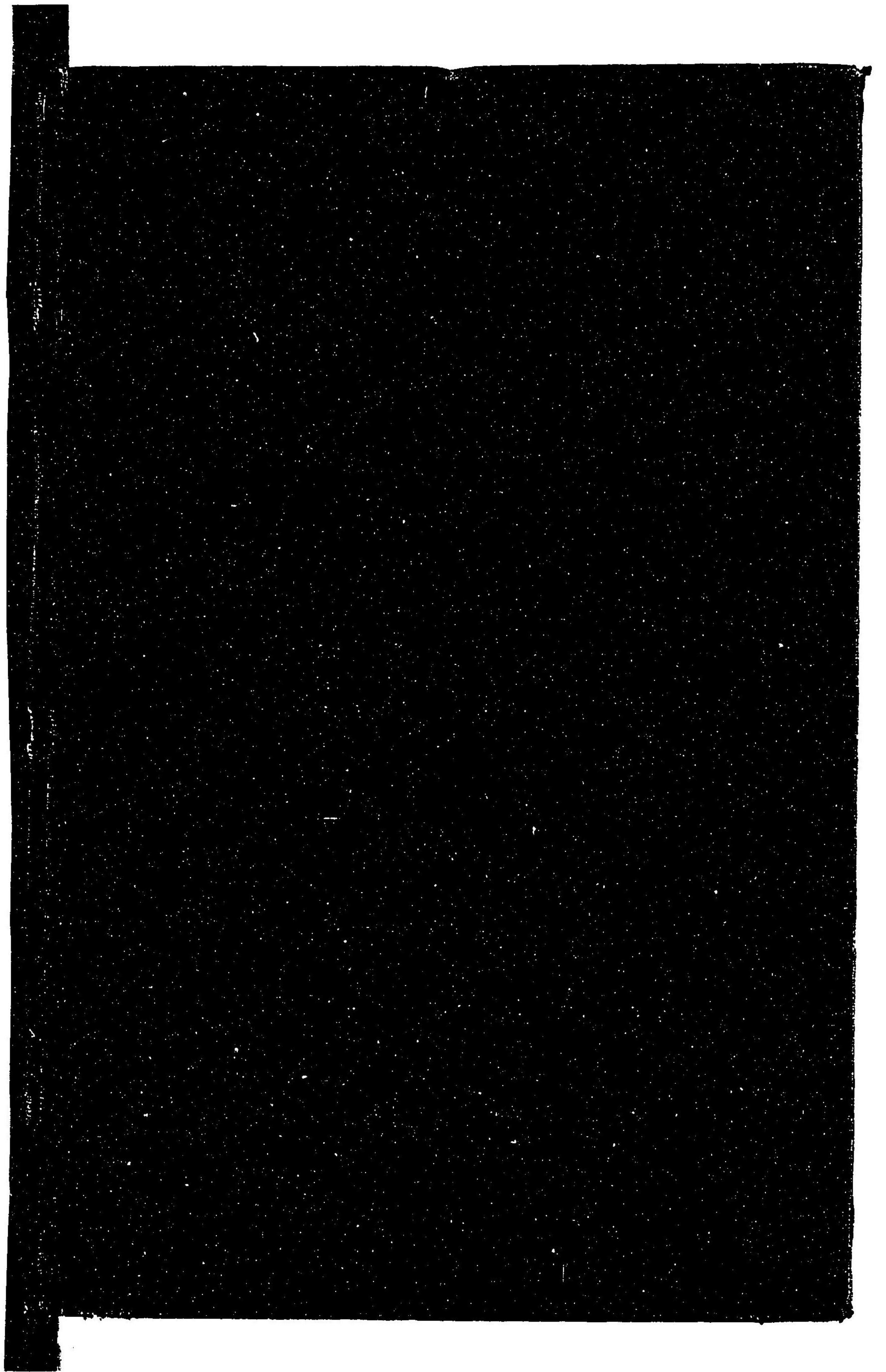
發兌元



小 氣 焔	小 哲 學	珍 鳴 長 明 海 道 記	國 史 資 料 回 國 雜 記	理 想 の 大 臣	禪 學 の 奧 義	哲 學 要 領	加 賀 の 千 代	成 效 者 の 苦 學	軍 隊 の 側 面
定 價 卅 四 錢	定 價 廿 五 錢	定 價 廿 五 錢	定 價 廿 四 錢	近 刊	定 價 卅 六 錢	定 價 卅 五 錢	定 價 卅 四 錢	定 價 卅 四 錢	定 價 卅 四 錢
理 想 の 政 黨	滑 稽 歷 史 談	理 想 の 大 臣							
定 價 卅 五 錢	定 價 卅 五 錢	定 價 卅 四 錢							

61

88
295





019588-000-0

88-295

禅学の奥義

藤波 一如/著

M35.6

ABG-0362

